

ア「かように候者は。唐土邯鄲の里に住居する者にて候。わらわはいにしえ。仙の法を行ひ給う御方に。お宿を参らせて候え。お宿の為と仰せられ。邯鄲の枕と申すを給りて侍う。これをめして一睡まどろみ給え。刹那が間に夢を御覧じ。越し方ゆく末の悟りを御開きある枕にて候。今日もお旅人の御泊りあらば。此方へ申し侍へ。その分心得候へ。その分心得候へえ。

シテ「浮世の旅に迷ひ来て。うき世の旅に迷ひきて。夢路をいつと定めん。これは蜀の国の傍に。盧生といへる者なり。われ人間にありながら佛道をも願わず。たゞ茫然と明し暮すばかりなり。まことや楚国の羊飛山に。尊き知識のまします由承り及びて候程に。身の一大事をも尋ねばやと思ひ。只今羊飛山へと急ぎ候

「住みな馴れし。国を雲路のあとに見て。国を雲路の後に見て。山又山を越え行けばそこしもなき旅衣。野暮れ山くれ里暮れて。名にのみ聞きし邯鄲の。里にも早く着きにけり里にも早く着きにけり

「急ぎ候程に。これははや邯鄲の里に着きて候。未だ日は高く候へども。此所に旅宿せうずるにて候。

シテ「いかに案内申候。ア「案内とは誰にて渡り候ぞ。シテ「これは旅人にて候。一夜の宿を御貸し候へ

ア「やすき間の御事にて候。こうこう御通り候へ。まずこれへお腰をめされ候え。いかに申し候。見申せば独りお旅人と見え給いて候が。何国より何方へ御通りなされ候ぞ。シテ「これは蜀の国の傍に。盧生といへる者なり。

ア「それはなに故、羊飛山へは御急ぎ候ぞ。シテ「われ人間にありながら佛道をも願はず。たゞ茫然と明し暮すところに。楚国の羊飛山に。尊き知識のまします由承り及びて候程に。身の一大事をも尋ねばやと思ひ立ちて候

ア「これははるばるの御旅にて候。さてわらわは。いにしえ仙の法を行ひ給う御方に。お宿を参らせて候え。お宿の為とて邯鄲の枕と申すを給りて候。これをめして一睡御まどろみあれかしと存じ侍う。シテ「儲その枕は何處に御座候ぞ。ア「あれなる大床なるが邯鄲の枕にて候。シテ「さらば立越え一睡みうずるにて候。ア「わらわはその内に粟のおだいをこしらへ候べし。やあやあお旅人の御泊りある間。粟のおだいをこしらへさむらえや

シテ「さてはこれなるが聞及びし邯鄲の枕なるかや。これは身を知る門出の。世の試に夢の告。天の與ふる事なるべし。一村雨のあまやどり

地「一村雨の雨宿り。日はまだ残る中宿に。假寝の夢を見るやと邯鄲の枕に臥しにけり邯鄲の枕にふしにけり

ワキ「いかに盧生に申すべき事の候。シテ「そもいかなる者ぞ。ワキ「楚国の帝の御位を。盧生に譲り申さんと。勅使にこれまで参りたり。シテ「思ひよらずや王位には。そも何故に座はるべき。ワキ「是非をばいかで揃べき。御身代を持ち給ふべき。その瑞相こそましますらめ。はやい輿にめさるべし。シテ「こはそも何とゆふ露の。光かやく玉の輿。乗りも習はぬ身の行くへ。ワキ「かるべきとは想はずして。シテ「天にも上る。ワキ「心ちして

地「玉の御輿にのりの道。玉の御輿に法の道。栄華の花も一時の。夢とは志ら雲の上人となるぞ不思議なる

～ 真ノ来序 ～

地「有難のけしきやな。有難の気色やな。もとより高き雲の上。月も光は明きらけき。雲龍閣や阿房殿。光も充ち満ちてげにも妙なる有様の。庭には金銀の砂を敷き。四方の門邊の玉の戸を。出で入る人までも。光を飾る装は。真や名に聞きし寂光の都喜見城の。楽みもかくやと想うばかりの景色かな千顆萬顆の御寶の数を連ねて捧げ物。千戸萬戸の旗のあし。天に色めき地に響く禮の聲も夥し禮の聲もおびたし。シテ「東に三十余丈に

地「白銀の山を築かせては。黄金の日輪を出だされたり。シテ「西に三十餘丈に。地「黄金の山を築かせては。白銀の月輪を出されたり。たとえばこれは。長生殿の裏には。春秋を富めたり不老門の前には。日月遅しという意をまなばれたり

ワキツル「いかに奏聞申すべき事の候。御位に即き給ひてははや五十年なり。然らば此の仙薬をきこしめさば。御年一千歳まで保ち給ふべし。さる程に天の濃漿や沆がいの盃。これまで持ちて参りたり。シテ「そも天の濃漿とは

ワキツル「これ仙家の酒の名なり。シテ「沆がいの盃と申すことは。ワキツル「同じく仙家の盃なり。シテ「壽命は千代ぞと菊の酒。ワキツル「栄華の春も萬年。ワキツル「君も豊に。シテ「民栄え。地「国土安全長久の。国土安全長久の。栄華も弥増しになほ喜びはまさり草の。菊の盃とりがいにいざや飲もうよ

シテ「めぐれや盃の。地「めぐれや盃の。流は菊水の流に牽かれてとく過ぐれば。手先づ遮る菊衣の。花の袂を翻して指すも引くも光なれや。さかづきの影の回る空ぞ久しき。子方「我がやどの。地「我が宿の。菊の白露今日毎に。幾代積りて測となるらん。よもつきじよも盡きじ薬の水も泉なれば。くめども汲めどもいやましに出づる菊水

を。飲めば甘露も斯くやらんと。心も晴れやかに。飛立つばかり有明の夜晝となき楽みの。栄華にも栄耀にもげに此の上やあるべき

～ 楽 ～

シテ「いつまでぞ。栄華の春も。常磐にて 地「な お幾久し有明の月
シテ「月人男の舞なれば。雲の羽袖を。重ねつ。喜びの歌を。うたふ夜もすがら
地「謡ふ夜もすがら。日は又出で。明らけくなりて。夜かと思へば シテ「晝になり 地「晝かと思へば
シテ「月またさやけし 地「春の花咲けば シテ「紅葉も色濃く 地「夏かと思へば シテ「雪も降りて
地「四季をいは目の前にて。春夏秋冬萬木千草も。一日に花咲けり。おもしろや。不思議やな
かくて時すぎ頃されば。かくて時過ぎ頃去れば。五十年の。栄華も盡きて。まことは夢の。うちなれば。皆消えいと
失せ果て。在りつる邯鄲の枕の上に。眠の夢は。さめにけり

ア「いかにお旅人。粟のおだいが出来て候

シテ「盧生は夢さめて 地「盧生は夢覚めて。五十の春秋の。栄華も忽ちにたゞ茫然と。起き上りて
シテ「さばかり多かりし 地「女御更衣の聲と聞きしは シテ「松風の音となり
地「宮殿楼閣は シテ「ただ邯鄲の假の宿
地「栄華の程は シテ「五十年 地「さて夢の間は粟飯の シテ「一炊の間なり
地「不思議なりや計り難しや シテ「つらい人間の。有様を案ずるに
地「百年の歡樂も命終れば夢ぞかし。五十年の栄華こそ。身の為にはこれまでなり。栄華の望も齡の長さも五十
年の歡樂も。王位になれば。これまでなりげに。何事も一睡の夢
シテ「南無三寶々々々々 地「よくい思へば出離を求むる。知識は此の枕なり。げに有難や。邯鄲のげにありがた
や邯鄲の。夢の世ぞと悟り得て。望叶へて帰りけり

※物語の進行把握の目的でご用意しました。「梅若本」を基に作成してありますが、ワキ狂言の言葉は当日通りではないこと、了承ください。